

第5章 附 論

附論1

等妙寺開創前夜の信仰空間をめぐる諸問題

久保 智康（叡山学院教授・京都国立博物館名誉館員）

1 池と伝観音堂跡の調査成果について

等妙寺は、鎌倉時代後期、天台宗戒家の祖、円観（恵鎮）が遠国に配置した四箇戒壇のうちの一寺で、円観の孫弟子理玉和尚（静義上人）が元応二年（1320）に奈良山に開山したと『宇和旧記』は記している。本堂・客殿・本坊跡（平坦部A、如意頭院跡）をはじめとする平坦面の発掘調査による遺構・遺物の検討から、等妙寺の成立年代が文献史料によるそれと合致することが確認され、中世をとおして境内域を拡大して隆盛をみたこの寺が、山寺遺跡として良好に遺されていることが明らかになった。

発掘調査とは別に留意すべき問題として、現在の等妙寺境内に建つ観音堂の本尊で山上の等妙寺から移座したとされる菩薩遊戯坐像のことがある。この像を等妙寺で如意輪観音と伝え、観音堂じたいも「寺院帳」に記す宝暦五年（1755）再建の「如意輪堂」とみていいこと、旧等妙寺平坦部Aを「如意頭院」と呼称してきたこと⁽¹⁾、平安時代後期に遡る絹本着色の如意輪観音像掛幅⁽²⁾を伝えてきたことから如意輪観音の信仰があったことは明白である。さらに後述する本像の像容の検討からも如意輪観音とみなして差し支えなく、以下では如意輪観音坐像と記す。岩田茂樹氏は、本像を詳細に調査して、等妙寺開創を100年ほど遡る13世紀第2四半期頃に造像されたことを明らかにした⁽³⁾。創建以前に遡る仏像は、一般論的に、別の場所から移座されたものとみなすこともあり得るが、岩田氏はその辺りについて言及を避けている。

天台宗の戒家の寺として成立した等妙寺であるから、本尊として最も相応しい尊格を挙げるならば、それは釈迦如来像である。ちなみに戒道場に掛ける授戒本尊図（等妙寺にも室町時代の古本が伝来する）は、中央に戒和上の含意で釈迦如来を描き、手前左右に羯磨師と教授師として僧形の文殊、弥勒両菩薩を描く⁽⁴⁾。また密教の灌頂という意味合いでは、両界曼荼羅の中心にあり、天台宗で釈迦如来と同体と説く胎藏界大日如来⁽⁵⁾を祀ることもあり得よう。いずれにしても戒家の重要寺院としての等妙寺が、密教の変化観音である如意輪観音を首尾一貫して本尊に祀る教理的脈絡は見出せない。

2019年3月に出土遺物の鑑識のため初めて旧等妙寺跡を訪れた筆者は、発掘調査中であった本堂跡背後の池跡の状況を実見した（図1）。折から、平安・鎌倉時代に遡る山寺の境内に築造されたところの巖崖・滝などを背後に負った池が、観音の住処とされる補陀落山を見立てたものであり、滋賀・石山寺（図2）と石川・



図1 旧等妙寺 池・滝と伝観音堂跡

那谷寺（図3）が現存する事例であるとする論考⁽⁶⁾を著し、各地の山寺に類例を捜していたところであった。旧等妙寺跡の池もまさにこれらの事例と近似するところから、発掘担当の幡上・織田両氏に、以下の5点を指摘した。

- ① 池の石組の一部は等妙寺創建以前の時期、すなわち13世紀以前まで遡るのではないか。
- ② 背後の岩盤を開鑿し巨石も用いて巖崖とし滝を落としたのも、同じく13世紀まで遡るのではないか。
- ③ 池背後の上方平坦面が「観音堂」と称されてきたので、ここに等妙寺開創以前から仏堂が営まれていたのではないか。
- ④ 以上が年代的に調査によって確認できたとする、それは等妙寺の前身寺院の存在を示唆し、堂の伝承名からしてもそこには観音を祀っていて、池・巖崖・滝・観音堂から構成される補陀落山を見立てた信仰空間が造られていたのではないか。
- ⑤ この観音堂に祀られた尊像こそ、現等妙寺の13世紀前半造像になる如意輪観音坐像ではなかったか。

本書で報告されるとおり、池の現状の大方は等妙寺開創時に形成されたが、石組の一部はそれ以前に遡ることが確認された。また調査中になる伝観音堂跡でも、等妙寺開創時のものとみられる仏堂跡と大規模な造成面の下に、小規模な仏堂跡や護摩供痕跡と思しい焼土層が検出されつつある。したがって、上記の指摘事項はほぼ確証が得られたことと思われ、②の巖崖と滝についても、初期段階の造成は等妙寺開創以前に遡る可能性がきわめて高くなったと考えられる。

2 二臂如意輪観音坐像の系譜と補陀落山の信仰空間

等妙寺観音堂の菩薩遊戯坐像（図4）は、前節で述べたように、状況証拠からみても如意輪観音として信仰されてきたということは間違いない。本節ではいま一つ踏み込んで、本像が造像段階から如意輪観音として製作されたことを、像容の検討から明らかにしたい。本像は、岩田茂樹氏が論じたとおり、鎌倉時代前期の仏像彫刻としてはきわめて秀逸な作行きである一方で、「左足を立膝にする」、「右足を下す」、「左手を膝の上に置く」、「右手を下に置く」という姿勢は、日本で造像され伝存する遊戯像ではほとんど類例がない。

清水真澄氏は、13世紀後半の鎌倉・禅居院伝来の観音菩薩半跏像を検討するにあたり、中国・韓国・日本に伝存する半跏像（遊戯像）を集成し、九つの類型に分類した⁽⁷⁾。等妙寺像をそれに照らすと、最も作例の多いNo. 1の類型の、手足の形が左右逆になるNo. 1'に当てはまる。事例としては陝西省延安清涼山万仏洞石窟像が挙げられているのみであるが、1・1'のすべてが中国で製作された像になり、大局的には、中国で最も主流であった菩薩半跏像を参照しつつ、手足を左右逆として日本国内で製作されたのが等妙寺像ということが出来る。

ここで留意すべきは、等妙寺像の造像にあたり、中国の諸像に見られない要素を付加した点である。まず注目したいのは右手の形で、手首を屈して掌を下に向けている。実際には、製作時期は不明ながら、本像の体軀に合わせた形状の岩座に手を添えた形をとる（図5）。もう一つの留意点は左手の掌を上に向けていることで、柄穴があり指を曲げているので如意宝珠を持っていたのではないかと岩田氏は推定した。しかし、文政二年（1819）に刊行された『等妙寺建立勸化帳』（等妙寺住職冷湛撰）の裏表紙に載る本像は、左手に蓮の花枝を持った姿で描かれている（図6）。筆者は、この両手の形と持仏、そして片足を岩座に垂下していることこそ、他例をみない本像が如意輪観音として造像されたことを



図2-1 石山寺 珪灰石露頭

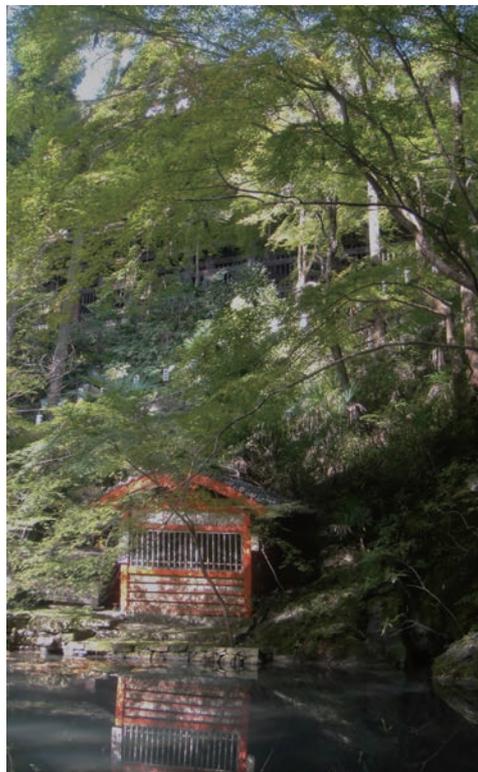


図2-2 石山寺 本堂崖下の池泉



図3 那谷寺 池と巖崖
向かって右奥の窟中に千手観音
を祀る本堂

示す重要な要件と考えており、以下で形姿に込められた意図を検討したい。

そもそも如意輪観音は通形を六臂とし、本像のごとき二臂像の類例は非常に少ない。そのような中で、二臂でしかも片足を垂下するという、等妙寺像と共通する形姿になる如意輪観音が石山寺本尊像である。石山寺の創建時の状況については、鎌倉時代の成立ながら『石山寺縁起』が具体的である⁽⁸⁾。

夫石山寺者、聖武皇帝之勅願、良弁僧正之草々也。本尊は二臂の如意輪、六寸の金銅の像、聖徳太子二生に御本尊云々。丈六の尊像を造て、其御身に彼少像をこめ奉る。

すなわち、聖武天皇の勅願により良弁が創建した寺で、本尊が六寸の金銅二臂の如意輪観音で丈六像の中に籠めていた。

しかし「正倉院文書」によれば、天平宝字五年(761)から造石山寺所による伽藍整備が始まり、塑像の丈六観音菩薩を造像、同六年に完成して、舍利を籠め「礒御坐」に安置されたとするが、この段階で本尊は「観音」としか記されていない⁽⁹⁾。井上一稔氏は、当該期の史料などの検討から、奈良時代には未だ密教の変化観音としての如意輪観音信仰は定着しておらず、平安時代に興った真言密教の中で、舍利を如意宝珠と同体と説く『大智度論』を根拠とし、石山寺二臂観音を舍利=如意宝珠の力をもつ如意輪観音と喧伝されるに至ったと論じた⁽¹⁰⁾。ちなみに、石山寺関係史料で最も古い『三宝絵』(永観二



図4 菩薩遊戯坐像



図5 磐座に坐した菩薩遊戯坐像



図6 『等妙寺建立勸化帳』表紙裏の本尊菩薩像

年（984）、源為憲撰）下、「東大寺千花会」に、

「近江の国志賀郡の河の辺にむかし翁の居て釣せし石あり。その上に如意輪観音を造り据ゑて祈り行はしめたまへ」とあり。すなわち尋ね求むるに、今の石山の所をえたり。観音を造りて祈るに、陸奥の国よりはじめて金出できたる由を申したてまつれり。すなはち年号を改めて天平勝宝と云ふ。とある⁽¹¹⁾。これは、大仏造立の鍍金に必要な金を求め金峯の蔵王に祈ったところ、志賀郡の河（瀬田川）の畔で釣りをする翁の居る石の上に如意輪観音を安置せよ、との説示を得て、今の石山に観音を造立したところ、陸奥で金を産出するに至った、という譚で、遅くとも10世紀後半には石山寺の二臂の観音が如意輪として知られていたのである⁽¹²⁾。

石山寺二臂如意輪観音像の印相については、『別尊雑記』巻第十八に見える記述が具体的である⁽¹³⁾。有所引二臂像与石山寺像頗有相違。従昔所造画二臂像、皆右手作施无畏。左手於膝上作与願印。垂下左足坐磐石上。大和国龍蓋寺丈六如意輪像亦同之。東大寺大仏殿左方如意輪亦同之垂下左足。石山寺焼亡之時、寺僧拜見之。左手作与願安膝上。左足垂下、右手持蓮花。と上安如意宝珠。其花茎分三枝。一枝未开花、一枝荷葉也。

古来の二臂像は、皆右手を施無畏印とし、左手を膝上に置いて与願印をなす。また左足は盤石の上に垂下するというが、石山寺が焼亡した際に寺僧が拝見した二臂像は、右手に三枝の蓮華を持ち、その上には如意宝珠を安じていた、という。石山寺の現本尊、四臂の如意輪観音像は承暦二年（1076）の火災後の再興像と考えられ、それ以前の平安中期に製作が遡る像（図7）と、山内法輪院持仏堂に祀っていた平安後期像（図8）という2軀の二臂如意輪観音像が伝存する⁽¹⁴⁾。いずれも手先は後補だが、当初の印相を踏襲しているとして、上記の記述に照らすと、前者が龍蓋寺（岡寺）像や東大寺大仏殿像と共通する印相で、後者が石山寺焼亡時に実見された像の印相ということになる。より古様な印相である前者が、石山寺創建時に造像された二臂の（如意輪）観音像の姿であったということになり、それに合致する図像が『別尊雑記』巻第十八に収載され（図9）、裏書でこれを「石山寺様」と記している⁽¹⁵⁾。いずれにしても、石山寺二臂像が左足を垂下して坐すのが本来的な姿であったのは間違いなく、創建以来の歴代本尊を礎座に安置したのも、その原則に則っていたとみてよいであろう。

ここまで石山寺二臂如意輪観音像について縷々述べてきた。改めて等妙寺像の像容・印相・持仏を



図7 石山寺蔵 二臂如意輪観音坐像 図8 石山寺蔵 二臂如意輪観音坐像 図9 『別尊雑記』所収 二臂如意輪観音

みると、手と足が左右逆になっているとはいえ、右足を磐座に垂下する点は石山寺歴代本尊と同じであり、左手に蓮華をもつという点も、前述した『別尊雜記』記載の石山寺焼亡時の本尊、もしくはそれを写したとみられる平安後期像と共通する。さらに後述するが、前節で挙げた④の想定どおり、磐座に坐す二臂像の下方に池を造っていることが何よりも大きな仏像安置空間の共通点でもある。以上から、等妙寺像の製作では、中国の半跏像の像容を基軸としつつも、鎌倉時代前期に石山寺で祀った本尊、二臂如意輪観音そのものを参照した可能性が大きいと思われる。

ただ1点、等妙寺像の重要な要件である右手を磐座に伏せる形は、石山寺本尊とは全く異なっている。前述の清水真澄氏分類のNo. 1 になる中国半跏像の多くが左手ではあるが同様に手を下に向けており、反対側の足を立膝にすることも相俟って、等妙寺像がそれら中国像の像容を引き継いでいると見えないこともない。しかし手首の屈し方がいささか異なり、中国像がいずれも左手首を直角に屈して腕を張り、身体の重量を支えているように表現されるのに対して（図10）、等妙寺像はそのような印象と違い、腕を張らず手首を軽く曲げて磐座に軽く置いているのである。清水氏は、中国像の姿勢について、下した足の反対側の手で体を支えるという「山や水や樹木に囲まれた自然環境の中で坐するという表現を、人体に照らして合理的写實的に表している」と評価したが、図像的な背景には言及していない⁽¹⁶⁾。

筆者は、等妙寺像の右手の形、加えていえば蓮華を持した左手も、六臂如意輪観音の図像を取り入れていると考えている。六臂の如意輪観音の図像は『大悲胎藏大曼荼羅』に載るものが通有で（図11）⁽¹⁷⁾、これに則った彫像が多数伝存する。左第一手は、腕をすんなりと伸ばし、手首を曲げて掌を蓮華座上にそこだけ描く磐上に添えている。等妙寺像の右手も、まさにこれと同様の様態を示していて、図像の左第二手に持つ蓮華もまた等妙寺像の左手のそれに共通する。六臂如意輪の像容は『観自在如意輪菩薩瑜伽法要』（唐・金剛智訳）の以下の記述に拠っており⁽¹⁸⁾、下線部が左第一・二手を示した部分である。

六臂身金色	皆想於自身	頂髻寶莊嚴	冠坐自在王	住於說法相
第一手思惟	愍念有情故	第二持意寶	能滿一切願	第三持念珠
爲度傍生苦	<u>左按光明山</u>	<u>成就無傾動</u>	<u>第二持蓮手</u>	<u>能淨諸非法</u>
第三手持輪	能轉無上法	六臂廣博體	能遊於六道	以大悲方便
斷諸有情苦				

とくに左第一手を「光明山」に按じる、という部分が、等妙寺像の右手の意味をも示唆する最も重要な記述である。光明山とは、東晋・仏駄跋陀羅の旧訳になる『華嚴經』六十卷本に見える補陀落山の異称で、六臂如意輪観音の第一手の掌を案じている磐こそが補陀落山を象徴する表現なのである。したがって、等妙寺像が二臂のうちの右手をそれと同じ形で添えた磐座そのものが、光明山すなわち補陀落山を含意しているといえるのである。

旧訳『華嚴經』で、光明山は以下のように説かれる⁽¹⁹⁾。

漸漸遊行至光明山。登彼山上周遍推求。見觀世音菩薩住山西阿。处处皆有流泉浴池、林木鬱茂地草柔軟。結跏趺坐金剛寶座。

また、唐・実叉難陀の新訳『華嚴經』八十卷本では、卷第六十八、入法界品で、「補怛洛迦」と名づく山、と訳した以下のごとき叙述がみえる⁽²⁰⁾。

善男子。於此南方、有山。名補怛洛迦。彼有菩薩、名觀自在。汝詣彼問。菩薩云何。学菩薩行、修菩薩道。即説頌曰、



図 10 神奈川県立歴史博物館蔵 菩薩半跏像



図 11 仁和寺本『大悲胎藏大曼荼羅』所収
六臂如意輪觀音

海上有_レ山多_レ聖賢_一、衆宝所_レ成極清淨 華果樹林皆遍滿 泉流池沼悉具足。勇猛丈夫觀自在、
爲_レ利_レ衆生_一住_レ此山。汝應_レ往_レ問_レ諸功德_一、彼當_レ示_レ汝大方便_一。
時善財童子、頂礼_レ其足_一、遶無量匝已。

すなわち、南方の海上にある補陀落山は観世音菩薩の住処で、旧訳ではその山西阿に住むとする。両訳とも、泉が豊かに湧いて池沼に注ぐという補陀落山のイメージが説かれ、これが石山寺の（如意輪）観音が坐す磬座とそれを据えた石山、そしてその麓に造られた池までを含んだ補陀落山を含意したことは、先稿で詳しく論じたところである⁽²¹⁾。さすれば、等妙寺像と磬座のみならず、それを元々安置していた観音堂の直下に展開する池と滝・石組も、補陀落山とその周りの海を意味したという結論が導き出されるのである。

以上をまとめると次のようになろう。等妙寺観音堂本尊の菩薩遊戯像は、鎌倉時代に入って間もない頃に日本へ中国から将来された半跏像の形姿を基軸としながら、理由は判然としないが手足の表現を左右逆にして造像された。その際に、当時の如意輪観音の基本形であった六臂像の要件のうち、左第一手を磬座に安じることを右手に、また左第二手に蓮華を持つことを左手に取り入れることで、如意輪観音のより明確な表徴を加えた。そして本像を奈良山に導入した時に、石山寺本尊の二臂という異形性と足を磬座に垂下するという特徴を本像との共通項として、補陀落山を含意する滝・石組を含んだ信仰空間まで石山寺に倣って造り上げることで、完璧なまでの如意輪観音の信仰の場を現出させたのである。

3 平安時代の仏教環境

筆者は、現在進行中の伝観音堂跡の調査を注視している。1でも触れたとおり、等妙寺開創時のものとみられる仏堂跡と大規模な造成面の下に、小規模な仏堂跡や護摩供痕跡と思しい焼土層が検出され、ここで鎌倉時代前期の造像になる如意輪観音坐像を祀っていたことはほぼ間違いない。問題は、この平坦面の最初の造成時期、すなわち等妙寺の前身になる山寺の創建時期がどこまで遡るかという

ことである。筆者はこれまで古代・中世の山寺の全国動向について検討し、12～13世紀に造営、拡充された山寺には、前身が平安時代前～中期に遡るものが少なくないことを指摘してきた。その要件として、以下の点を挙げることができる⁽²²⁾。

- ① 平地から遙拝される山容の山（霊山）が存在し、その山麓・山中に平坦面が展開する。
- ② 平野部に古代の集落が展開する。古代の郡家（役所）、交通路なども関連する。
- ③ 古代の国境・郡境の山中に立地する。
- ④ 平安時代の仏像が存在する。
- ⑤ 山寺への入口近くの山麓に古社が存在する。

等妙寺を中心とする鬼北町から隣接する松野町にかけて、これらが当てはまる、すなわち古代の山寺が存在した可能性のある地区がいくつか指摘できる。そもそもこの一帯は、西伊予から西土佐へと向かう幹道を通じ、また四万十川の本・支流の舟運も古代に遡って営まれたであろう。したがって、平安時代には人が住み、集落も営まれたはずだが、遺跡分布調査では古代の遺物散布はごく少なく、古代宇和郡の郡家があったとされる西予市域の宇和盆地に比べ、人口がさほど多いとは言えないようである。ただし、人が往来すれば仏教僧も同様に往来したに違いない。平安時代はそんな時代である。北海道と南西諸島を除く全国各地の状況がそうであるように、当地域にも①に示した霊山に宿る神仏への信仰の場が営まれた可能性は十分ある。

まず、等妙寺の背後の奈良山の山塊、東高月山・郭公山・古鬼ヶ城の景観は霊山たるに相応しい。鬼ヶ城山系の三本杭と称される標高1226mの山頂遺跡から、奈良時代の須恵器が採集されている。そのような例は各地の霊山で知られ、神の降り立つ社や磐座への奉養品、あるいは山林修行の僧侶の足跡かも知れない。そのような霊山へ至る入口の山麓部、現在の等妙寺のある辺りの市ノ又、本谷、正連寺谷、市越などの谷々に、古代山寺の存在した可能性を考えたい。とくに正連寺谷には、相当大規模に展開する平坦面が確認されていて、将来的な発掘調査が期待される。

鬼北町中心部の近永や三間川兩岸の年則、国遠、清延、大門、内深田などは、古代幹道・舟運に沿った地区なので、小高い山々の山麓が注意を要する。例えば、年則の標高225mの独立峯（図12）は、神奈備形ともいえる秀麗な姿を市越辺りからも望むことができ、その南麓、三間川の畔に鎮座する弓瀧神社は国遠・清延・近永の三カ村の総鎮守ともされる。宇和郡に延喜式内社は見えず、文献上も古代に遡るかは判然としないが、立地環境からすると、交通路の安全祈願をも担った古社と思われる。⑤のように、山頂と山麓に神を祀る場合、その間は神聖で清浄な山林修行に相応しい浄処と認識されたことから、古代山寺が営まれたと述べる事例が全国各地にみられる⁽²³⁾。弓瀧神社と背後の独立峯の山中・山麓のいずれかにも、古代に遡る山寺が存在した可能性があり、平坦面の探索を勧めたい。

近年、鬼北・松野両町内で仏像調査が進められ、④に該当しそうな平安時代に遡る作例も確認された。広見川（四万十川）左岸の延野々、金峯山広福寺には、平安時代、11世紀に遡る阿弥陀如来坐像（図13）が伝わり、南に接して御嶽神社（蔵王神社）が鎮座する。またその前面の畑地が広福寺遺跡（図14）で、12世紀の遺物を伴った配石遺構と柱穴が検出されていて、寺院関連遺構の可能性も考えられている⁽²⁴⁾。大和（奈良県）の金峯山（現在の山上ヶ岳）は、平安時代半ばから蔵王権現の信仰を集め、寛弘四年（1007）の藤原道長による埋経の作善は当時からよく知られていた。平安後期には、金峯山と蔵王権現信仰、さらに如法経写経と経塚造営の作善も全国に拡大していった。広福寺と蔵王神社も平安後期まで遡る可能性が高く、とすれば周辺の丘陵上に経塚が造営されたことも考えられる。

広見川右岸、松野町松丸の河後森城跡の丘陵北麓の天満神社石段脇には永昌寺が管理する普門堂が



図 12 市越より望む年則の独立峯



図 13 広福寺蔵
阿弥陀如来坐像



図 14 広福寺遺跡



図 15 永昌寺蔵
十一面観音立像

あり、平安時代後期、12世紀に造像された十一面観音立像（図15）を祀る。天満神社は菅原道真を祭神とし、本社京都・北野天満宮では本地を十一面観音としてきたことから、普門堂の十一面観音も天満神社の本地仏であった可能性が指摘される。ただし天満神社は礁崎から宮の瀬、奥の谷へと移転し、現在地へは安政五年（1858）に遷宮したと伝えるので、元々この地区にあった本像がそれを契機に本地仏として移座されたとも考えられる。ちなみに永昌寺は、現在曹洞宗に属するが元は真言宗寺院で、山号を医王山とし本尊には薬師如来を祀っている。観音菩薩や薬師如来は、全国の古代山寺に最もよく祀られた尊格で、観音悔過や薬師悔過という、自己の罪障を仏に懺悔して厄災の消除を祈願する法会の本尊とされた。とくに12世紀前後に発展する山寺が、③に示したように国境や郡境にしばしばみられるのも、国衙や郡家が国域や郡域の厄災消除を願い、山寺に祈祷料を支出し、また造営・維持に当たることもあったからである。山上の寺に祀った古仏が山麓寺院に降りた事例は全国各

地に多く、普門堂の十一面観音立像も、山上の何処かの仏堂に祀られていたかも知れない。その平坦面の一部が河後森城跡の郭に利用された可能性も検証すべきであろう。

以上のごとく、鬼北・松野両町の三間川・広見川兩岸の山間に、等妙寺と同時期あるいはそれを遡る古代山寺が存在した可能性が十分考えられる。平坦面の踏査により事例が増えていけば、文献では知られざる古代の西伊予と西土佐の間の仏教僧の往還の具体像も見えてくるであろう。

【註】

- (1) 江戸時代に描かれた「等妙寺旧跡古図」（愛媛大学附属図書館蔵）の現本堂跡の位置の堂宇に「如意頭院」と注記される。
- (2) 西田多江「作品紹介 等妙寺蔵絹本着色如意輪観音像」『愛媛県美術館研究紀要』4号 2005年
- (3) 岩田茂樹「木造菩薩（伝如意輪観音）遊戯坐像」『國華』1435号 2015年
- (4) 戒家における東国戒壇として名をはせた鎌倉・宝戒寺の本尊は貞治四年（1365）に造像された地藏菩薩であるが、これは僧形であることに意味をもたせ戒和上を含意したものか。
- (5) 天台宗の円密一致の教理では、釈迦牟尼は生身の姿で教を説いたがそれはあくまで仮の姿であり（応身）、教を説く根本の存在（法身）こそ毘盧遮那仏すなわち大日如来に他ならず、つまり大日如来と釈迦如来は同体ということになる。
- (6) 久保智康「加賀・那谷寺の「奇石」と観音信仰」『坂本廣博博士喜寿記念論集 佛教の心と文化』同刊行会 2019年
- (7) 清水真澄「鎌倉 禅居院の観音菩薩半跏像について」『成城大学短期大学部 紀要』30号 1999年
- (8) 『続群書類従』28輯上 釈家部九十七
- (9) 井上一稔「奈良時代の如意輪観音信仰とその造像—石山寺像を中心に」『美術研究』353号 1992年
- (10) 『大日本古文書』巻之五（編年文書）
- (11) 江口孝夫校注『三宝絵詞』下 現代思潮社
- (12) 岩田茂樹氏は、『三宝絵』が語られる10世紀前半に活動した醍醐寺の淳祐（890-953）が石山寺に入寺したのを契機に、師の聖宝が興した如意輪観音信仰をこの寺に導入したと論じた（岩田「石山寺の彫像—本尊二臂丈六観音像を中心に」『観音のみてら 石山寺』奈良国立博物館 2002年）。
- (13) 『大正新修大蔵経』図像部3、164頁c。なお後半部分の記述は、『十卷抄』や天台宗の儀軌書である『阿婆縛抄』などでも引用する。
- (14) 前掲注(12)の奈良国立博物館編『観音のみてら 石山寺』に掲載される作品1・2。岩田氏による作品解説を参照。
- (15) 『大正新修大蔵経』図像部3、図像61。同177頁c
- (16) 前掲注(7)に同じ。
- (17) 『大正新修大蔵経』図像部1、701頁
- (18) 『大正新修大蔵経』20、213頁b
- (19) 『大正新修大蔵経』9、718頁c
- (20) 『大正新修大蔵経』10、366頁c
- (21) 前掲注(6)に同じ。
- (22) 久保智康「国府をめぐる山林寺院の展開—越前・加賀の場合—」『朝日百科 日本の国宝別冊 国宝と歴史の旅 3 神護寺薬師如来の世界』朝日新聞社 1999年。同「古代山林寺院の空間構成」『古代』110号 早稲田大学考古学会 2001年
- (23) 久保智康「山寺と神社の構成—神仏習合の空間論序説—」『古代日本の山寺』高志書院 2016年
- (24) 松野町ホームページ。https://www.town.matsuno.ehime.jp/soshiki/10/1208.html